

# ITS分野に新たな付加価値を創造 「車々間通信」は実用化フェーズへ

クルマとクルマ、人とクルマが通信することで事故を防ぐ。そんな夢のシステムの実用化が近づきつつある。2010年以降のビジネス展開を睨み、ITS分野に注力するOKIの最新の取り組みを追った。 文 坪田弘樹 本誌)



OKI  
官公システム事業部  
無線技術研究開発  
部部長  
(沖テクノセンタ  
横須賀センタ長)  
徳田清仁氏

ぶつからないクルマを作る。見通しの悪い交差点での出会い頭の衝突、不意の飛び出し、左折時の巻き込み。そうした危険を未然に防ぎ、安全なクルマ社会を実現するための取り組みが進められている。

官民連携による無線通信を利用した安全運転支援システムの開発に一層拍車がかかったのは、2006年の「IT新改革戦略」以降だ。「2012年末の交通事故死者数5000人以下」という政府目標達成に向け、実用化のターゲットラインを2010年度に設定。研究開発・実証実験の段階にあった各種プロジェクトの実用化、普及に向けての動きが本格化した。

高度道路交通システム(ITS)は、自動料金収受システム(ETC)が急速

に普及(08年12月時点のセットアップ件数は2638万台)。他にもVICSや、移動体通信を利用するテレマティクスなど、クルマに情報を提供する無線システムは、すでにさまざまな場面で利用されている。

これらのシステムは、渋滞を避けたい、料金支払を手軽にしたいといった利便性向上を主目的に普及が進んできた。だが、ITSに「安心安全」という次世代の付加価値をもたらすシステムの実用化は、まさにこれからだ。「ぶつからないクルマ」という夢とともに、そこに眠るビジネスの芽も大きく膨らみ始めている。

## クルマと人が直接通信

無線通信を使った安全運転支援

には、いくつかの方策がある。

道路に敷設されたインフラ設備とクルマとの間で情報をやり取りし、カーナビへの表示や音声でドライバーに警告を発する「この先に信号機がある」「学校が近くにあるから減速しろ」等のが「路車間通信」システム。また、路側設備を介さずクルマ同士で直接情報をやり取りすることで、遮蔽物などで視認できないクルマの存在を通知し、出会い頭などの事故を回避するのに有効なのが「車々間通信」(図表1)だ。

この研究開発に長年注力してきたのがOKI。同社は、ETCにも用いられている5.8GHz帯による双方向無線通信DSRC(Dedicated Short Range Communication)を使った車々間通信システムを開発。ITS推進協議会が主体となり全国9地域で実施されている「08年度大規模実証実験」においても、参加する全自動車メーカーがOKIの装置を採用しているという。

「高速料金割引のメリットが牽引してETCは急速に普及したが、成熟市場になりつつある。OKIの取り組

図表1 車々間通信の活用シーン

